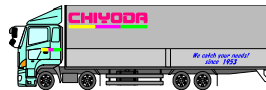
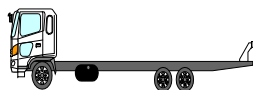


## 関連・協力会社各位



### あがな 贖いの日々

事故当事者の  
痛恨の手記

#### 運転者の責任

建設業 50代

私は現在、市原刑務所で服役しています。私の犯した交通犯罪により二人の尊い命を奪い、二人に重傷を負わせてしまったからです。

寒さが身に染みてくる時期でした。私は忙しい日常の合間の週末に登山に行くため、深夜の高速道路をオートクルーズコントロールにセットして、車を走らせていました。私の車は運転補助装置が付いていて、レーンキープ機能も備えていました。交通量が少ない深夜の高速道路の運転は、退屈に感じるものでした。私はダッシュボードに取り付けられたタブレットで録画したテレビ番組を再生し、視界の片隅にその映像を捉えながら運転していたのです。

変わり映えない高速道路を走り続けていた時、「カシヤン」という、乾いた小さな音を聞きました。なんの音かは私には判断できませんでしたが、ミラーや左右の窓越しに周囲を確認しましたが、特に変わった

としたことが、事故の原因となっている認識に至りました。

これまで私は、もし自分が事故の原因になっていたのだとしたら、どのように責任を取ったら良いのだろうかとか悩み続けていて、命には命で償わなければならないのではないかと考えるようになっていました。今思えばノイローゼ状態だったのかもしれませんが。

私は逮捕されたことによって、今まで築いてきた仕事と社会的地位と信用を失いました。

私が事故原因になっていると認識してから、謝罪の手紙を書きましたが、被害者の方の連絡先を知ることが出来なかった為、代理人弁護士を通じて、謝罪の申し入れを行いました。しかし、申し入れは拒否され、手紙を受け取ってもらうこともありませんでした。

被害者ご遺族への謝罪は法廷の中で二度行っただけで現在に至っています。判決は、過失運転致死傷罪、禁錮2年の実刑が言い渡されました。

刑務所に収監されてから、自分の犯した罪をどのように償っていくべきか、ずっと

た様子はありませんでした。その音を聞いた時と前後して、タブレットの操作に気を取られていた時に「ビビビ」という警告音が鳴り、車体が車線を逸脱しようとしていることに気付き、咄嗟にハンドルを切ったことを後から思い出すことになります。

この時点で私は事故が発生していたことを知りませんでした。4名を乗せた乗用車がガードレールに激突し、2人が死亡、2人が重傷を負う、重大な交通事故が発生していたのです。

私の車と被害車両は接触が無く、私自身も被害車両を認識していなかったことから、私が事故の原因となっていると判断され逮捕されたのは、事故発生から8ヶ月程経過してからの事でした。起訴後に証拠資料が開示され、私の持っている記憶との照合から、私がタブレットを操作して、それに気を取られて咄嗟にハンドルを切ったことにより、被害車両が自車との衝突を避けよう

考えていますが、明確な答えは見つけることが出来ていません。しかし、償いの第一歩は自分の犯した罪と向き合い、根本原因の究明をすることだと思っています。

根本原因は私の内面にあり、交通ルールを軽視し、起こりうる結果の重大性を想像することができなかったこと。車の運転補助装置を過信して、タブレットを操作したこと。そして、自分だけは大丈夫といった偏った考え方をもち、慢心の気持ちは強くなっていったことが挙げられ、これらは自分の生活環境や生活習慣が大きく関わっていると考えています。今回の悲惨な交通事故は、全て私が運転者としての責任を怠っていたことにあり、起こるべくして起きた犯罪なのです。私が運転者としての責任を全うしてさえいれば、2人の夢と希望に満ちた尊い命を突然奪うことはなかったのです。

そして、この事件は被害者の方と関わりのあった多くの人を傷つけてしまっただけでなく、私自身の家族や仕事の関係者にも大きな影響を及ぼしてしまいました。

私の償いは始まったばかりです。一生を掛けて、自分の罪と向き合っていかなければなりません。

(第60集より掲載)